

学会発表

農薬等のポジティブリスト化に伴う検査の精度管理 に関する研究 (第1報)

住本建夫¹ 織田 肇¹ 岩上正藏¹ 田中之雄¹
村田 弘¹ 起橋雅浩¹ 高取 聡¹ 北川陽子¹
岡本 葉¹ 酒井 洋² 上野英二³ 田中敏嗣⁴
宇野正清⁵ 宇治田正則⁶ 佐々木珠生⁷ 堤 泰造⁸
衛藤修一⁹

第 43 回全国衛生化学技術協議会

2006.11.1~2 鳥取県

9地方衛生研究所による共同外部精度試験を、各参加機関の SOP による検査法で実施した。精度管理用試料は延べ 14 種類の農薬を添加した食品 4種類を用い、5 回の測定値を求めた。

内部精度管理では得られない各機関の SOP の偏りや測定値の傾向が外部精度管理調査を実施したことにより得られた。

- *1: 大阪府立公衆衛生研究所
- *2: 新潟県保健環境科学研究所
- *3: 愛知県衛生研究所
- *4: 神戸市環境保健研究所
- *5: 奈良県保健環境研究センター
- *6: 和歌山市衛生研究所
- *7: 広島市衛生研究所
- *8: 徳島県保健環境センター
- *9: 北九州市環境科学研究所

ノロウイルスとは

伊藤 文明

第 16 回広島院内感染症対策研究会シンポジウム

2007.2.10 広島市

2006 年のノロウイルス集団発生状況をもとに、その発生要因、発生状況や疫学調査、検出ノロウイルスの遺伝子解析に加え、感染症発生動向調査に基づく感染性胃腸炎報告数、病原体検出情報等の分析結果を基に、ノロウイルスの発生状況と予防方法について報告した。

カキ混合検体からのノロウイルス濃縮操作における アミラーゼ処理の有用性

野田 衛^{*1} 西尾 治^{*2} 伊藤文明 池田義文
第54回日本ウイルス学会学術集会

2006.11.19~21 名古屋市

カキ混合検体からのノロウイルス(NV)濃縮操作におけるアミラーゼ(AM)によるグリコーゲンの消化の有用性を、AM消化を行わない場合およびカキを個体別に検査する場合と比較した。AM-混合法は他の2法と比較して、セカンドリアルタイムPCR法で高いINV検出率を示し、陽性コントロールcDNA添加実験で、検体のPCR阻害作用を受けにくく、添加量に近い定量値を示した。さらに、>0コピー/系を陽性としたリアルタイムPCR法の結果とセカンドリアルタイムPCR法の結果の一致率はAM-混合法が最も高かった。以上の結果から、AM-混合法はカキ混合検体からのNV濃縮法として有用と考えられた。

- *1: 現 国立医薬品食品衛生研究所
- *2: 国立感染症研究所

当科におけるパレコウイルス感染症の臨床的特徴と 最近の流行について

沖本聡志* 米倉圭二* 下園彩子* 羽田 聡*
金子陽一郎* 野本勝弘* 高本聡* 岡野里香*
兵藤純夫* 伊藤文明 山本美和子 野田 衛
池田義文

広島感染症研究会

2006.11.25 広島市

当科におけるヒトパレコウイルスは 2005 年に 4 例、2006 年(8 月まで)に 18 例から検出された。合併症として、急性脳症 1 例、頭蓋内出血 1 例、呼吸管理を要した無呼吸発作 1 例、痙攣発作 1 例、低 Na 血症 2 例、ウイルス性筋炎 1 例、腸重積症 3 例を認めた。

- *: 広島市立舟入病院 小児科

Campylobacter fetus が検出された壊死性筋膜炎および化膿性脊髄炎の2症例

石村勝之 松本 勝 吉岡嘉暁 榎山誠也^{*1}
小松原康子^{*2}

衛生微生物技術協議会第26回研究会
2006. 7. 5~6 札幌市

C. fetus subsp. fetusはヒツジやウシ, またヒトの流産菌として古くから知られているが, 稀ではあるが, 敗血症や髄膜炎, 関節炎, 下痢症など多彩な疾患がみられる病原細菌である。我々は, 2001年および2002年にC. fetus subsp. fetusを病巣部位より検出した壊死性筋膜炎および化膿性脊髄炎の2症例を経験したので, その概要と分離菌株の性状について報告した。

*1: 済生会広島病院

*2: 広島鉄道病院

広島市で分離されたサルモネラ, 腸管出血性大腸菌, 赤痢菌の薬剤耐性化機構の解析

佐藤麻衣子^{*1} Ashraf M. Ahmed^{*1} 石村勝之
萱島 隆之^{*2} 島本 整^{*1}

第59回日本細菌学会中国・四国支部総会
2006.10.14~15 山口市

広島市で2005年~2006年に分離されたサルモネラ, 腸管出血性大腸菌, および赤痢菌計27株の薬剤耐性の表現型と耐性遺伝子の解析を行った。その結果, class 1 integronがサルモネラ13株, class 2 integronが赤痢菌3株とサルモネラ1株, bla_{TEM-1}が腸管出血性大腸菌5株, bla_{CMY-2}がサルモネラ1株から検出された。今回解析した菌株の多くから薬剤耐性遺伝子が検出されたことから, 耐性遺伝子の特定とその伝播に関する動向把握は医療ならびに疫学上重要である。

*1: 広島大学大学院生物圏科学研究科

*2: 現 社会局保健部食品保健課

腸管出血性大腸菌 O157:H7 感染事例由来株の分子疫学的解析法の検討—MLVA法とPFGE法の比較—

石村勝之 古田喜美^{*1} 下村 佳^{*2} 吉野谷進
谷口正昭 笠間良雄 松本 勝^{*3} 吉岡嘉暁
衛生微生物技術協議会第26回研究会

2006.7.5-6札幌市

STEC 感染症において PFGE による解析は diffuse outbreak の探知に有用であるが, 迅速で解析能の高い他の疫学的解析法が使用できれば, より精度の高い菌株識別が期待できパルスネット解析情報の有用性が一層高まる。昨年度, 我々はサブタイプ ND, 2a, ND 型を示す STEC0157:H7 株を用いて Multi-Locus Variable-Number Tandem-Repeats Analysis (MLVA) 法の予備的検討を行った。今回は MLVA の解析性の向上と評価のため, Keys らのプライマーを加えた MLVA 法を異なった PFGE サブタイプの菌株に適用し, PFGE 解析結果と比較した結果, その解析能の有用性が認められた。

*1: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

*2: 現 社会局保健部食品保健課

*3: 退職